

【研究ノート】

看護大学生の卒業後の自己教育力の変化 —— 卒業後6ヶ月, 卒業後1年の変化 ——

Changes in the Self-Education Ability of Nursing College Graduates: At the Time of Graduation, Six Months after Graduation, and One Year after Graduation

永田美和子, 武藤 稲子, 大城 凌子

要旨

<研究の背景>

医療の高度化, 複雑化等の問題により, 看護職は状況に応じて自ら判断し行動する力である看護実践能力を身につけることが求められている。そのためには, 生涯学び続ける力である「自己教育力」を身につけることが重要であると考えられる。

<目的>

看護学生の卒業後の自己教育力の変化を明らかにすることで, 看護基礎教育における自己教育力育成に関する示唆を得ることを目的とする。

<方法>

看護大学卒業時, 卒業後6ヶ月, 卒業後1年に調査票を個別に郵送し回収した。調査票は自己教育力測定尺度40項目と自尊感情尺度10項目の邦訳版を使用した。分析は, 自己教育力の総得点, 下位尺度の合計得点, 自尊感情の合計得点を求め調査時期で比較した。

<結果>

有効回答は卒業時61名(平均年齢22.9±4.4歳), 卒業後6ヶ月29名(平均年齢25.1±6.7歳), 卒業後1年31名(平均年齢25.1±6.5歳)であった。自己教育の下位尺度の調査時期比較では有意な差は認められなかった。平均合計得点は「成長・発展への志向」が最も高く, 一方で, 「自信・プライド・安定性」が最も低いことが明らかになった。また, 自尊感情と「学習の技能の基盤」および「自信・プライド・安定性」で正の相関関係が認められた。

<考察>

自己教育力のいずれの下位尺度は卒業時と比較して変化はなく維持されていることが明らかになった。しかし, 成長・発展への志向は得点が高く, 自信・プライドの得点が低いことが明らかになった。卒業時に自尊感情を高めるような看護基礎教育方法の検討・支援の必要性が示唆された。

キーワード: 看護大学生, 卒業後, 自己教育力, 変化

I はじめに

医療の高度化, 複雑化等の問題により, 看護職は専門的知識の獲得と状況に応じて自ら判断し行動する力である看護実践能力を身につけることが求められている。看護基礎教育においては, これら社会のニーズに応えられる看護実践者の育成を目指し, 生涯学び続ける力である「自己教育力」の育成が重要であると考えられる。1983年に文部省は中央教育審議会・教育内容等検討小委員会でも

自己教育力は「主体的に学ぶ意思, 態度, 能力であり, 学習への意欲, 学習の習得, 学習を続ける意思」とし提唱した。その後, 梶田は, 自己教育力の育成は, 変化に対応する為に必要であることを示唆し, 自己教育力を「自分自身で学び, 成長, 発展してゆける力」と定義し, 自己教育力の4側面(I側面: 成長, 発達への志向性, II側面: 自己の対象化と統制(コントロール), III側面: 学習の技能と基盤, IV側面: 自信・プライド・安定性)を提示している(梶田, 1994)。

看護師は就職後、日々進歩する医療の中で様々な課題に直面しながらも、問題に向き合い、自己と対話しながら解決する過程において自らの専門性を獲得していく。看護基礎教育における自己教育力に関する関心は高く、1994年に大学基準協会は「21世紀の看護学-教育基準の設定に向けて-」において、「看護専門職にあるものは、多様にしかも急速に変化しつつある社会状況を認識し、生涯を通して最新の知識、技術を学習しつづける」と述べ、生涯教育を念頭に置いた自己教育力の必要性を示唆している。また、2003年「新たな看護のあり方検討会報告書」においても、看護職として自律し、成長することが求められ、その重要性が指摘されている。自己教育力は看護師の問題解決能力にも影響を及ぼすことが明らかになっており（永野，1999）、看護学生が卒業後も適切な判断のもとに問題解決をし、看護を実践するためには自己教育力の育成は重要であると考えられる。

本学では、初年次より、少人数制（6-7名）によるゼミワークを取り入れフィールドワークやディスカッション等を通して主体的に学ぶ力（自己教育力）を育成するための支援を行っている。それら教育技法は、自己教育力育成に関しても一定の成果が認められている（徳田他，2009）。自己教育力は看護基礎教育のみだけではなく、生涯を通して育成されるものであると考える。卒業後に看護職者として、多様な問題に直面した時に、看護実践能力の向上のため、必要な時に必要な内容を自ら学んでいく力、すなわち本学で身につけたであろう自己教育力を駆使し解決していくことが期待される。しかし、看護基礎教育での成果が卒業後どのように変化しているのかは不明である。

本研究は、看護学生の卒業後の自己教育力の変化を明らかにすることで、看護基礎教育における自己教育力育成に関する示唆を得ることを目的とする。

II 研究方法

1. 調査対象

平成24年3月に本学看護学科を卒業した87名中、協力の得られた者。

2. 調査時期

卒業時（平成24年3月）、卒業後6ヶ月（平成24年9～10月）、卒業後1年（平成25年2～3月）に実施した。

3. 調査方法

卒業時、卒業後6ヶ月、卒業後1年に調査票を個別に郵送した。回答は無記名とし、記入後の調査票は対象者より直接研究者に返送された。

4. 調査内容

調査票は梶田（1994）が作成した30項目の自己教育力調査票に西村他（1995）が追加した自己教育力測定尺度10項目を追加した合計40項目とRosenberg, Mが作成した自尊感情尺度10項目の邦訳版（清水，1996）、対象者の属性として年齢、性別で構成した。

1) 自己教育力

自己教育力とは、自ら学び成長させていく力で、西村他（1995）が、梶田の自己教育力尺度に10項目を追加し、信頼性と妥当性を検証した自己教育力尺度40項目を使用した。自己教育力尺度は4側面から構成されている。側面Ⅰは「成長・発展への志向」で、「将来、他の人から尊敬される人間になりたい」、「自分の能力を最大限にのばすよう、いろいろ努力したい」、「たとえ認められなくても、自分の目標に向かって努力したい」など10項目から成る。側面Ⅱは、「自己の対象化と統制」で、「自分の良くないところを自分で考え直すようにいつも心がけている」、「自分の考えや行動が批判されても腹を立てない」、「自分の良いところと悪いところがよくわかっている」など10項目から成る。側面Ⅲは、「学習の技能と基盤」で、「自分の調べたいことがある時に図書館（室）を利用している」、「自分の調べたいことについて文献検索していくことができる」、「他の人の話を聞いたり本を読む時、内容を振り返りまとめてみる習慣がある」など10項目から成る。側面Ⅳは、「自信・プライド・安定性」で、「今のままの自分ではいけない、と思うことがある」、「他の人にばかりにされるのは、がまんできない」、「ときどき、自分自身がいやになる」など10項目から成る。回答方法は、「あてはまる5」、「ややあてはまる4」、「どちらともいえない3」、「ややあてはまらない2」、「あてはまらない1」の5件法で回答を求めた。逆転項目は逆配点とした。自己教育力総得点範囲は40～200点で、高得点であるほど自己教育力が高いことを示している。

2) 自尊感情

Rosenberg, Mが作成した自尊感情測定尺度の邦訳版10項目を用い、「あてはまる5」、「ややあてはまる4」、「どちらともいえない3」、「ややあてはまらない2」、「あてはまらない1」の5件法で回答を求めた。自尊感情総得点範囲は、10点～50点で、高得点であるほど自尊感情が高いことを示している。

5. 分析方法

自己教育力、自尊感情は、得点が高いほど自己教育力、自尊感情が高くなるように加算し、逆転項目は回答の数字を逆転して数量化した。自己教育力の総得点、各側面の合計平均得点、自尊感情の合計得点を求め調査時期で比較した（Kruskal-Wallis検定）。また、自己教育力と

自尊感情の相関関係はSpearman検定を行った。統計的有意水準は5%とした。統計処理には、SPSS 21.0 for Windowsを用いた。

6. 倫理的配慮

研究対象者に研究目的・方法・個人が特定されないなどのプライバシーの保護、得られたデータは統計的に処理し研究目的以外に使用しないこと、分析は全体集計を行うため個人が特定されないことを文書で説明し、調査票の提出をもって同意を得たものとした。調査表は無記名であり、調査票と同封した封筒に各自で封をして郵送してもらい、個人が特定できないようにした。本研究は、名桜大学人間健康学部倫理委員会の承認を得て実施した。

III 結果

有効回答は卒業時61名（有効回答率70.1%）、卒業後6ヶ月29名（33.3%）、卒業後1年31名（35.6%）であった。また、平均年齢は、卒業時22.9±4.4歳、卒業後6ヶ月25.1±6.7歳、卒業後1年25.1±6.5歳であった。

自己教育力測定尺度全体の信頼性を示すクロンバックの α 係数は、卒業時0.77、卒業後6ヶ月0.74、卒業後1年0.78であった。各側面の α 係数は、卒業時0.69~0.79、卒業後6ヶ月0.68~0.74、卒業後1年0.70~0.79の範囲内であった。

1. 調査時期による自己教育力総得点の変化

自己教育力総得点は、卒業時133.5±12.8、卒業後6ヶ月133.0±11.5、卒業後1年131.0±13.1と徐々に低下していたが有意な差は認められなかった（図1）。

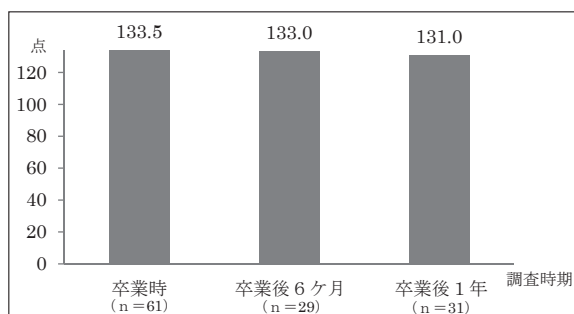


図1 調査時期による自己教育力総得点の変化

2. 調査時期による自尊感情総得点の変化

自尊感情総得点は、卒業時32.0±6.8、卒業後6ヶ月に34.0±7.3と上昇したが、卒業後1年32.0±4.3であった。有意な差は認められなかった（図2）。

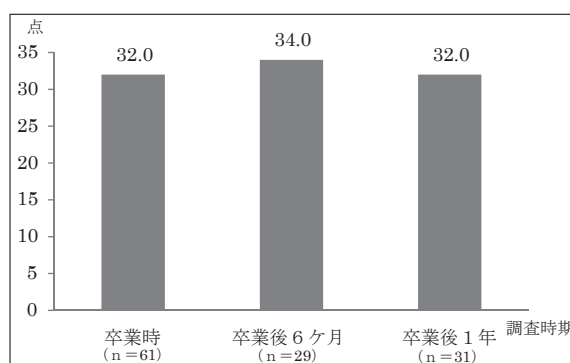


図2 調査時期による自尊感情総得点の変化

3. 調査時期による自己教育力側面別得点の変化

1) 側面Ⅰ：成長・発達への志向

側面Ⅰ10項目は4側面で最も得点が高く、卒業時36.9±4.6、卒業後6ヶ月37.3±4.3と変化はなく、卒業後1年36.2±4.0と低下していたが、有意な差はなかった。また、10項目の下位項目でも有意な差はなかった（図3、表1）。

2) 側面Ⅱ：自己の対象化と統制

側面Ⅱ10項目は、卒業時33.6±3.8、卒業後6ヶ月33.6±3.6と変化はなく、卒業後1年34.2±4.1と得点が高くなっていったが、有意な差はなかった。10項目の下位項目では、「28 疲れている時には、何もしたくない」の平均得点が卒業後1.76±0.88から卒業後6ヶ月1.32±0.66と有意に低下していた（ $p < .05$ ）（図3、表1）。

3) 側面Ⅲ：学習の技能と基盤

側面Ⅲ10項目は、卒業時32.8±4.5、卒業後6ヶ月31.5±4.4と低下し、卒業後1年31.6±5.7であったが有意な差はなかった。10項目の下位項目では、「2 自分の調べたいことがある時に図書館（室）を利用している」の平均得点で、卒業後6ヶ月2.67±1.27と有意に低下していた（ $p < .01$ ）。また、「6 自分の調べたいことについて文献探索していくことができる」の平均得点が、卒業後1年2.89±1.23と有意に低下していた（ $p < .01$ ）（図3、表1）。

4) 側面Ⅳ：自信・プライド・安定性

側面Ⅳ10項目は4側面の中で最も得点が低く、卒業時

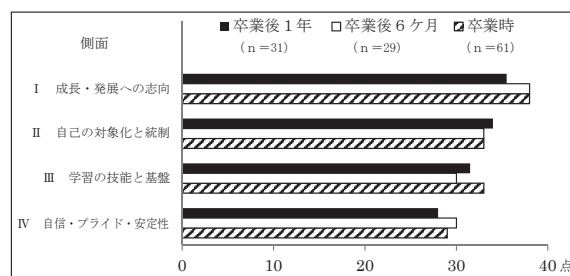


図3 調査時期による自己教育力側面別得点の変化

表1 自己教育力の項目別と調査時期比較

() SD

	卒業時 (n=61)	卒業後 6ヶ月 (n=29)	卒業後 1年 (n=31)	p 値	
I 成長・発展への志向	1 将来、他の人から尊敬される人間になりたい	4.28 (0.71)	4.28 (0.71)	4.17 (0.65)	0.621
	5 自分の能力を最大限にのばすよう、いろいろ努力したい	4.26 (0.66)	4.35 (0.48)	4.27 (0.64)	0.916
	9 たとえ認められなくても、自分の目標に向かって努力したい	3.83 (0.88)	3.96 (0.74)	3.86 (0.63)	0.885
	13 自分でなければやれないことをやってみたい	3.98 (0.87)	4.07 (0.71)	4.13 (0.69)	0.833
	17 自分がやりはじめたことは、最後までやりとげたい	4.21 (0.80)	4.28 (0.65)	4.17 (0.71)	0.908
	21 社会に出てからよい仕事をし、多くの人に認められたい	4.03 (0.90)	4.14 (0.80)	4.00 (0.70)	0.565
	25 これから専門的な資格や学位などを取りたい	3.88 (0.92)	3.57 (0.92)	3.75 (1.05)	0.461
	29 いったい何のために勉強するのだろうか、といやになることがある☆	2.86 (1.15)	2.96 (1.29)	2.65 (1.23)	0.502
	33 ぼんやりと何も考えずにすごしてしまうことが多い☆	2.38 (1.18)	2.17 (1.24)	2.41 (0.98)	0.587
37 人の一生は結局偶然のことで決まると思う☆	3.28 (1.02)	3.57 (1.16)	3.03 (0.86)	0.055	
項目平均点	36.98 (4.67)	37.39 (4.36)	36.20 (4.03)	0.461	
II 自己の対象化と統制	4 自分のよくないところを自分で考え直すようにいつも心がけている	4.05 (0.64)	4.14 (0.59)	4.10 (0.67)	0.901
	8 自分の考えや行動が批判されても腹を立てない	2.83 (1.01)	2.85 (1.00)	3.31 (0.84)	0.073
	12 自分の良いところと悪いところがよくわかっている	3.65 (0.84)	3.78 (0.91)	3.62 (0.86)	0.558
	16 他の人から欠点を指摘されると自分でも考えてみようとする	4.35 (0.63)	4.28 (0.59)	4.27 (0.52)	0.654
	20 できるだけ自分を押しさえて、他の人にあわせようとしている	3.51 (1.11)	3.53 (0.92)	3.55 (0.73)	0.878
	24 腹がたつてもひどいことを言ったりしないように注意している	4.11 (0.80)	4.25 (0.79)	4.17 (0.75)	0.575
	28 疲れているときには、何もしたくない☆	1.76 (0.88)	1.32 (0.66)	1.79 (1.04)	0.024 *
	32 テレビを見てしまって、勉強がやれないことが多い☆	2.51 (1.24)	2.46 (1.47)	2.68 (1.13)	0.630
	36 ちょっといやなことがあると、すぐに不機嫌になる☆	3.01 (1.22)	3.10 (1.13)	3.37 (1.14)	0.393
40 いやになった時でも、もうちょっとだけもうちょっとだけ、と頑張ろうとする	3.95 (0.79)	3.92 (0.76)	3.65 (0.72)	0.171	
項目平均点	33.66 (3.88)	33.67 (3.67)	34.26 (4.19)	0.751	
III 学習の技能と基盤	2 自分の調べたいことがある時に図書館(室)を利用している	3.98 (0.96)	2.67 (1.27)	3.00 (1.13)	0.000 **
	6 自分の調べたいことについて文献検索していくことができる	3.73 (0.93)	3.60 (1.06)	2.89 (1.23)	0.004 **
	10 他人の話の聞いたり本を読む時、内容を振り返りまとめてみる習慣がある	2.85 (0.94)	3.32 (0.94)	3.00 (1.10)	0.071
	14 考えを深めたり、ひろげたりするのに話し合いや討議を大切にしている	3.76 (0.92)	3.75 (1.00)	3.62 (0.94)	0.618
	18 考えていることを筋道だてて書いたり、伝えたりできる	3.20 (1.00)	3.17 (0.94)	3.37 (0.86)	0.774
	22 たとえ話などをもちいて人にわかりやすく、説明するのがにがてである☆	2.48 (1.11)	2.25 (1.00)	2.37 (0.90)	0.802
	26 自己評価する時には、自分の目標にたらずして行っている	3.40 (0.86)	3.28 (0.89)	3.65 (0.76)	0.292
	30 自分に必要な文献や記録を分類・整理しておく習慣がある	2.65 (1.10)	2.67 (1.09)	2.68 (0.84)	0.855
	34 わからないことがあると、すぐ人に聞く傾向がある	3.41 (1.09)	3.46 (0.88)	3.55 (0.90)	0.890
38 とりくみたいことによって、それにあった学習方法や手続きを調べる	3.66 (0.83)	3.35 (0.98)	3.41 (0.62)	0.185	
項目平均点	32.86 (4.56)	31.57 (4.41)	31.63 (5.78)	0.347	
IV 自信・プライド・安定性	3 今のままの自分ではいけない、と思うことがある☆	1.63 (0.73)	1.57 (0.69)	1.68 (0.71)	0.603
	7 他人にばかにされるのは、がまんできない	3.33 (0.96)	3.85 (1.07)	3.24 (1.02)	0.017 *
	11 とくどき、自分自身がいやになる☆	2.01 (1.04)	2.17 (1.24)	2.00 (0.78)	0.860
	15 何をやってもだめだと思う☆	3.66 (1.08)	3.60 (1.06)	3.44 (0.94)	0.354
	19 自分のことを、はずかしいと思うことがある☆	2.35 (1.03)	2.46 (0.83)	2.65 (0.97)	0.294
	23 今の自分が幸福だと思う	3.98 (0.91)	4.00 (0.72)	3.62 (1.08)	0.142
	27 自分のやる事に自信を持っている方だと思う	2.95 (0.96)	3.00 (1.01)	3.06 (0.75)	0.866
	31 生まれ変わるとしたなら、やはり今の自分に生まれたい	2.92 (1.14)	2.71 (1.11)	3.13 (0.87)	0.409
	35 今の自分に満足している	2.75 (1.00)	2.35 (1.02)	2.62 (0.97)	0.257
39 自分にもいろいろとりえがあると思う	3.73 (0.91)	3.78 (0.87)	3.62 (0.56)	0.562	
項目平均点	29.23 (5.47)	29.53 (5.29)	28.66 (4.08)	0.772	

☆は逆転項目 ** p < .01 * p < .05

29.2±5.4, 卒業後6ヶ月29.5±5.2, 卒業後1年28.6±4.08と低下していたが有意な差はなかった。10項目の下位項目では、「他の人にばかにされるのは、がまんできない」の平均得点で、卒業後6ヶ月3.85±1.07と高く有意な差があった ($p<.05$) (図3, 表1)。

5) 自己教育力平均総得点と自尊感情

自尊感情と自己教育力平均総得点の相関係数は0.531, 側面Ⅰの相関係数は0.290, 側面Ⅲの相関係数は0.338, 側面Ⅳの相関係数は0.746と正の相関がみられた(表2)。

表2 自己教育力平均総得点と自尊感情との相関係数

	自己教育力 平均総得点	側面Ⅰ	側面Ⅱ	側面Ⅲ	側面Ⅳ
自尊感情	0.531**	0.290**	0.050	0.338**	0.746**

** $p<.01$

IV 考察

自己教育力尺度を用いて本大学卒業後から1年間の変化を検討した。本研究では自己教育力総得点と卒業時、卒業後6ヶ月、卒業後1年の調査時期で有意な差は見られなかった。また、自己教育力の4側面と卒業時、卒業後6ヶ月、卒業後1年後の変化でも有意な差はなかった。従って、自己教育力の4側面は卒業後、維持されており、看護基礎教育で修得した自己教育力は育まれていると推察された。特に、側面Ⅰ「成長・発展への志向」は4側面の中で得点が高く、卒業後1年は若干低下したものの維持されていた。これは、看護専門職業人としての自己向上への志向が高く安定していることが考えられた。反面、側面Ⅳ「自信・プライド・安定性」は4側面で最も得点が低かった。畔柳(2013)の1～3年目の看護師を対象とした研究では、1年目の看護師は3年目の看護師より側面Ⅳ「自信・プライド・安定性」が低いことを報告している。また、看護学生の自己教育力においても、側面Ⅳの「自信・プライド・安定性」得点が一番低いことを報告している(多久島, 2005)。

今回、側面Ⅳ「自信・プライド・安定性」に影響を及ぼしている項目をみると、「他の人にばかにされるのは、がまんできない」の項目で卒業後6ヶ月に有意に高くなっていた。一般的に卒業後6ヶ月は少しずつ業務にも慣れ、夜勤や複数の患者を一人で担当する時期でもあり、多重業務をこなす時期でもある。つまり、新人看護師として先輩看護師から少しずつ自立していく時期であり、一人でできるだろうかと不安が押し寄せ中、他の新人看護師と看護実践能力を比較されながらも、自身を鼓舞しながら踏みとどまっている時期であることが推測された。卒業後6ヶ月の時期は、新人看護師が離職を意

識する時期でもあり、業務内容で優先順位の確認をしたり、指導の中で褒める等、新人看護師の自信を奮起するような手厚いサポートが必要であることが示唆された。また、卒業生が大学に集い、困っている事や悩みなどの情報を共有し支援する場としてのホームカミングデーを設ける等、卒業生を支援しながら基礎看護教育の課題を検討する場の必要性が示唆された。

酒井(2000)は、看護学生の自己教育力に関連する要因で側面Ⅳ「自信・プライド・安定性」は自尊感情の高低に影響を及ぼしていると報告している。福田らは(2001)、経験年数および年齢が増すと、自尊感情は有意に高くなる傾向があると報告している。本研究は酒井の報告と対象者が異なり一概には比較はできないが、自己教育力平均総得点と自尊感情では側面Ⅳ「自信・プライド・安定性」で強い正の相関が認められた。自尊感情は、自分自身に自身が持つ、自身を肯定的にとらえることである。佐久間ら(2004)は、側面Ⅳ「自信・プライド・安定性」に影響を与える要因として、目標との関連を上げている。本学卒業生が「自信・プライド・安定性」をもって卒業し卒業後もそれらを維持するには、自身の課題を明確にし、自身の目標の設定ができ、それに対して努力する具体的な行動をイメージする必要があると考える。本学の看護基礎教育では、入学時よりキャリアポートフォリオを活用し、各学年前期後期に自己の目標を定め、クラス担当と面談および評価を行っている。キャリアポートフォリオは、自分自身が仕事や学習をしていく中で、日々考えたことや獲得した情報などをポートフォリオに入れ、俯瞰しながら目標へ向かうことで、よりクオリティの高いアウトカムを生むことができ、俯瞰することで自己の成果や成長を客観的にみることで、問題発見から課題解決のプロセスを可視化し、自己管理・自尊感情・自己肯定観に有効であるとしている(鈴木, 2010)。しかし、未だにキャリアポートフォリオの活用方法が分からずに、面談時に持参しない学生や目標設定のやらされ感が強く受身の学生もおり、面談時に慌てて目標を設定する学生や抽象的な実行不可能な目標を設定している学生もいる。学生自らが自己の課題を明確にし、目標設定ができるように、入学時ガイダンスでキャリアポートフォリオの意図について、丁寧な説明が重要である。また、面談時に目標設定の重要性を再確認し、学生自身の評価および教員評価の結果を学生へフィードバックし、学習の意義が明確化でき、次の行動に移せるような指導が重要であると考えられる。このようなサイクルを継続することで、卒業後も自らポートフォリオを活用し、キャリアを積み重ねていく中で、自己教育力の側面Ⅳが高くなり自尊感情の維持および向上の一助になることが考えられる。

卒業後6ヶ月で側面Ⅱ「自己の対象化と統制」の下位項目「疲れている時は何もしたくない」、側面Ⅲ「学習の技能と基盤」の下位項目「自分の調べたいことがある時に図書館(室)を利用している」で有意に低下していた。また、卒業後1年で「自分の調べたいことについて文献検索していくことができる」が有意に低下していた。西村他(1995)は、自己教育力の4側面の中でも特に側面Ⅲ「学習の技能と基盤」と側面Ⅳ「自信・プライド・安定性」は高い相関があると報告している。卒業後6ヶ月は、先に述べたように多重課題に直面する時期でもあり、仕事に疲れており、疲労が蓄積し、図書館を利用して知識を得るなどの余裕もなく、何もしたくないなど、支援が必要な時期であることが考えられた。梶田(1994)は、「『自信・プライド・安定性』の側面は、他の3つの側面を支えるものであり、自信をもっているかどうか、プライドを持っているかどうかによって、人は主体的であるかどうかが決定的な点といっても過言ではない」と報告している。卒業後6ヶ月の時期に、不安を表出できるような環境づくりや疲れた身体を休める環境づくり等、自信を維持しながら学習意欲を継続できるような支援の必要性が示唆された。一方で、有意な差はなかったが側面Ⅲ「学習の技能と基盤」で最も得点の低かった項目は、「たとえ話などを用いて人にわかりやすく説明することが苦手である」は卒業時より低い項目であった。自分の意見を言えるなど自己表出できるような環境づくりが必要であることが示唆された。看護基礎教育の教育目標として、教養教育科目で主体的に学習する協同学習の環境や自己表現の場を設けているが、更なる自己の考えを伝えられるような教育方法の工夫の必要性が示唆された。

本研究は、卒業時よりの自己教育力の変化の調査であるため、本学卒業生の在学中の自己教育力は不明である。今後は入学時から自己教育力の測定を行い、自己向上への志向および卒業後に特に「自信・プライド・安定性」を維持・向上できるための本学看護学生の学習進度による自己教育力の変化を調査する必要がある。

V 結論

本研究の目的は、A大学看護学生の卒業後から1年間の自己教育力の変化を分析し、自己教育力育成における示唆を得ることである。結果、自己教育尺度の4側面の調査時期比較では有意な差は認められなかった。しかし、側面Ⅰ～Ⅳの平均合計得点では、側面Ⅰ「成長・発展への志向」が最も高く、側面Ⅳ「自信・プライド・安定性」が最も低いことが明らかになった。また、自尊感情と自己教育力平均総得点、側面Ⅰ、Ⅲ「学習の技能の基盤」、Ⅳで正の相関関係が認められた。卒業時に「自信・プラ

イド・安定性」を持ち卒業後も自尊感情が維持・向上できるような教育方法の検討・支援の必要性が示唆された。

引用・参考文献

- 梶田 叡一 (1994) 『自己教育への教育』, pp.49-50, 明治図書.
- 加藤直子, 堀裕美, 鈴木伸子 (2004) 「基礎看護学実習Ⅱ終了時における自己教育力」, 『秋田県看護教育研究誌』, No. 29, pp.17-22.
- 川島美佐子 (2007) 「看護学生の『自己教育力』に関する文献的考察」, 『足利短期大学紀要』, Vol. 27, pp.47-51.
- 北山三津子, 松下光子, 両羽美穂子, 石井康子 (2011) 「看護学科卒業時の看護実践能力を担保するための教育の開発」, 『岐阜県立看護大学紀要』, Vol. 11, No. 1, pp.71-78.
- 工藤一子 (2009) 「看護職者の自己教育力と看護実践の関連—A県の11病院における質問紙調査から—」, 『日本看護管理会誌』, Vol. 13, No. 1, pp.76-83.
- 久保和子, 松崎和代, 服部裕子, 稲田久美子 (2008) 「クリニカルラダーと臨床看護師の自己教育力との関連」, 『徳島日赤病院』, Vol. 13, No. 1, pp.137-141.
- 畔柳あゆみ, 近藤暁子 (2013) 「卒後1～3年目看護師の自己教育力, 仕事意欲の比較」, 『日本看護学会論文集 看護管理』, pp. 79-82.
- 酒井明子 (2000) 「看護学生の自己教育力に関連する要因—Self-esteemの高低に焦点をあてて—」, 『福井医科大学研究雑誌』, Vol. 1, No. 1, pp. 113-128.
- 佐久間雅子, 岩本淳子, 藤村敦代 (2004) 「自治体病院の看護師自己教育力と自己教育力に影響を及ぼす要因に関する検討」, 『第35回日本看護学会論文集 (看護教育)』, pp. 51-53.
- 鈴木敏恵 (2010) 『ポートフォリオとプロジェクト学習』, 医学書院.
- 佐藤みつ子, 森千鶴 (1998) 「自己教育力と家庭での学習状況との関連」, 『山梨医大紀要』, Vol. 15, pp. 22-27.
- 多久島寛孝, 永田華千代, 北野正文, 三村孝俊, 内山久美, 梅橋操子他13名 (2005) 「医療系大学在学中の学生の自己教育力の推移」, 『保健科学研究誌』, No. 2, pp. 95-108.
- 千頭一世, 尾原喜美子 (2013) 「文献にみる看護師の『自己教育力』の研究方法与内容」, 『高知大学看護学会誌』, Vol. 17, No. 1, pp.3-12.
- 徳田菊恵, 金城祥教 (2009) 「看護基礎教育における看護学生の自己教育力育成の試み—大学1年次教育にお

- ける教養演習の学びの分析から－』、『名桜大学紀要』, No. 15, pp.6-30.
- 永野光子 (1999) 「臨床看護婦・士の問題解決行動の質と看護婦・士特性との関連検証研究」、『千葉看護学会誌』, Vol. 5, No. 1, pp.23-30.
- 永野光子 (2005) 「看護基礎教育から看護継続教育への連携－自己教育力を身につけた看護職者の育成に向けて－」、『看護教育学研究』, Vol. 14, No. 2, pp.25-26.
- 永野光子 (2008) 「新人看護師支援に向けた看護基礎教育における研究成果の活用と課題－看護学教員の立場から－」、『看護教育学研究』, Vol. 17, No. 2, pp. 24-25.
- 能見清子, 杉田由加里, 吉本照子 (2014) 「看護師の自己教育力の発展を促すための課題－看護師の自己教育力に関する概念と関連因子についての文献検討より－」, 『千葉看護学会誌』, Vol. 19, No. 2, pp.65-72.
- 西園貞子 (2013) 「看護大学生の自己学習力の獲得状況の検討」, 『奈良女子大学人間文化研究科』, No. 28, pp.107-119.
- 西村千代子, 奥野茂代, 小林洋子 (1995) 「看護婦・士の自己教育力測定尺度の検討」, 『日本赤十字社幹部看護婦研修所紀要』, No. 11, pp.22-33.
- 西村正子, 瀧井ヒロミ, 湯舟貞子 (2003) 「看護職者の生涯学習 (その1) －自己教育力と今後の課題－」, 『岐阜大医学部紀要』, Vol. 51, pp.218-223.
- 福田春枝, 荒川千秋, 吉田亨, 佐々木かほる, 斉藤基, 行木真由美, 木暮総子, 小野道子, 小林秀代, 星野悦子, 正田美智子 (2001) 「看護師・士の自尊感情についての調査－経験年数, 年齢, 仕事満足度, 就業意向との関連－」, 『群馬保健学紀要』, Vol. 22, pp.11-16.
- 堀文子, 牧野典子, 渡邊実香, 山田聡子, 粥川早苗, 井口弘子, 上田ゆみ子, 足立はるゑ (2006) 「看護大学生の自己教育力育成に関する研究－第一報 学生の自己教育力に関する研究の動向－」, 『中部大学生命健康科学研究所紀要』, No. 2, pp.7-19.
- 堀文子, 牧野典子, 山田聡子, 井口弘子, 渡邊実香, 上田ゆみ子, 足立はるゑ (2007) 「生命健康学部学生の自己教育力－第一報 入学時における自己教育力の実態－」, 『中部大学生命健康科学研究所紀要』, No. 3, pp.13-19.
- 牧野典子, 中山奈津紀, 堀井直子, 堀文子, 山田聡子, 井口弘子, 渡邊実香, 上田ゆみ子, 足立はるゑ (2008) 「生命健康学部学生の自己教育力－第二報 入学後1年間の自己教育力－」, 『中部大学生命健康科学研究所紀要』, No. 4, pp.21-28.
- 牧野典子, 中山奈津紀, 堀井直子, 山田聡子, 井口弘子, 渡邊実香, 足立はるゑ (2009) 「生命健康学部学生の自己教育力 (第3報) －入学後2年半の変化－」, 『中部大学生命健康科学研究所紀要』, No. 5, pp.1-8.
- 三島三代子, 吾郷美奈恵, 石橋照子, 梶谷みゆき (2011) 「病院に勤務する看護職の看護力・参画力・自己教育力の取得免許による比較」, 『島根県立大学部出雲キャンパス研究紀要』, Vol. 6, pp.23-31.

Changes in the Self-Education Ability of Nursing College Graduates: At the Time of Graduation, Six Months after Graduation, and One Year after Graduation

NAGATA Miwako, MUTO Ineko, OSHIRO Ryoko

Abstract

Background

Nursing college graduates are required to attain practical power that they conduct themselves using their own judgment because of the highly-developed and complicated nature of medicine. Therefore, acquiring a self-education ability is necessary for continuing education.

Purpose

This research aimed to acquire suggestions for developing a self-education ability in fundamental nursing education by clarifying changes in the self-education abilities of nursing college graduates.

Method

Survey forms were sent to nursing college graduates at the time of graduation, six months after graduation, and one year after graduation. Forty items were translated into Japanese for a self-education measurement scale and 10 self-esteem questions were used for the survey. The total score of self-education ability, subscale, and feelings of self-esteem were compared among the investigated periods.

Ethical Consideration

Approval was given by a relevant ethics committee.

Results

The number of responses immediately after graduating was 61 (average age was 22.9 ± 4.4), after six was 29 (average age was 25.1 ± 6.7), and after one year was 31 (average age was 25.1 ± 6.5). No significant differences in the subscale of self-education were observed among investigation times. "Consciousness for growth and development" remained at the highest level. Conversely, "confidence, pride and steadiness" fluctuated at the lowest level. Positive correlation existed among a feeling of self-esteem, "base of learning skills" and "confidence, pride and steadiness."

Discussion

It was clarified that although novice nurses were maintaining consciousness for growth and development, their confidence and pride declined and fluctuated. It is suggested that discussion and support for fundamental nursing education is necessary to maintain self-esteem after education.

Keywords: Nursing College students, after graduation, Self-Education ability, change